あなた悪魔？！

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなた悪魔？！

【Ｎコード】
Ｎ４２０１Ｃ

【作者名】
ルリ

【あらすじ】
小学５年の青汰は着物姿のぼさぼさの髪（でも顔は結構ととのっている）の２０代前半ごろの男に出会う。なんじゃこんじゃしてるうちに異世界へいくことになる・・・しかも悪魔（魔物）っぽい側で、だけど楽しく、真剣に個性豊かなキャラも異世界場面になると登場。

青汰とレオ　会う！！

第１話　暑い夏のさかりだった第１話　レオと清汰

「警察署ならこの近くにあるのでそこで何でも尋ねたら良いですよ。」

僕はその男の人の身なりを一瞬見て、何か尋ねられる前にそう言った。その人とあったのは

暑い夏の日。

ここは田舎だから周りに人はいない。花はたくさん風にそよいでいるけど・・・

ぼくは男の人をもう一度見た。

その男の人の身なりはやはり怪しい以上のものだった。

２０歳前半ぐらいでいつ切ったか分からない長いボサボサの髪に薄汚れた服、それだけならホームレスかお金ない人だけで済まされる。

だけど、その人は着物だ。しかもこんなの店じゃ売ってないというような。色は深い茶色。そして柄は一つもない。下は下で草履を履いている。しかも形がいびつだ。手作りのような感じ

だ。

「・・・・・・」

僕はとても逃げ出したくなった。絶対こんな変な人と関わりたくない。冷や汗をかくのが分かる。

今の世の中にこんな格好して、堂々と歩く。この人は頭がおかしくなったのだろうか。このもうろうとする暑さで。

そして僕はなぜかその人に腕をつかまれていた。いつのまにか。最悪だ。これで僕はこの変な人から逃げ出せない。

こんな格好をしているということは自分は江戸の人間だとでも思っているのだろうか・・・

「お前その目つきは何なのや、その目つきは！まあ、そんな事はどうでも良いわーなあチビ、ここは江戸やよな？」

ほらきた。やはりこの人は暑さで頭がどうにかなったのだ。かわいそうに・・・

」
木々たちは平和そうに葉を揺らしている。僕の心境もしらずに・・・。

「あ、あの今は平成ですよ。江戸なんて何百年か前の話じゃないですか。」

少し答える声が上ずった。

話を聞くその人の顔がみるみるうちに変わっていった。

「何やてえ〜！！」

「ひっっ」

いきなり大きな声で突然そういわれたので思わずのけずりそうになった。僕の腕が痛くなってきた。

もうどう対処すれば良いか分からず泣きだしたくなってきた。

「あ、あの、腕を放してくれませんか？」

声を振り絞ってそれだけいうと、男の人は僕の腕を握っているのを今、気ずいたような顔をした。

あーすまん、すまんと悪びれもないように言われながら、僕の腕は開放され、新鮮な空気に触れた.

「平成と言うことは、力を使うの失敗したかーそんじゃこんな格好やったら駄目やな。」

その人は1人ごとをつぶやいた。何のことだろう。力?

そして突然僕は肩をつかまれた。

「なあチビ今日お前んちに泊まらせてくれへんか?赤の他人やけどお兄さん助けるおもて、もし泊まらせてくれたら、わいがなんでこんな格好してるのかも、大サービスで教えちゃう.」

教えてほしくない・・・・

「まあ、泊まらせてくれなかったらー少々手荒な」

「わ、分かりましたーーーー!!!!」

ぼくは途中でさえぎった。聞きたくない。その後の言葉は。絶対この人は危ない人だ。だけど

僕はこの人を家に入れることになった。

「ありがとさん」
その人は僕からお茶をさわやかな笑顔で受け取った。
そしてその人は唐突に話始めた。
「まあ何で俺ががあんな格好してたかと言うとな。」
「はあ、」
僕はその人の話を黙って聞くのが1番良いだろうと思って、時々信じてもないくせにあいずちを打ちながらその人の話を聞いていた。
話すとき本を読んでいるような標準語で話始めた。

コーレニウスは地球ではない世界である。
そこには動物、そして白の者と黒の者がいた。
白の者は人間に近い存在であるが。人間とは程遠い存在でもあった。
白の者は田を作りはしても自然を破壊する進化を望まない。そういう進化は進化ではないという信念の元に生きている。
よって進化はあったとしても、人間ほど目に見える進化はしない。
自然と一体となり生きているのである。

黒の者も姿かたちは人間に似てる者もいれば少し見た目が違う者もいる。
黒の者は生命を吸い取り魔力の糧とする。
植物から吸い取ることもあるが死ぬ間際の人間や老人や悪事を行った者から吸い取ることもある。
黒の者で子供から生命を吸い取る者も少数だがいる。

地球の者から見ると黒の者は悪魔と変わらないだろう。

それによって黒の者と白の者は対立してる。
白の者から見れば黒の者は悪魔と変わらない。
ぶつかりあうことは、ないようにしているがやはりあるのである。
そして白の者でも聖力を持っている者がいる。

黒の者と対抗するためである。

そして今、将に白の者、聖なる剣探探さんとす。黒のもの全力でそれをとめようとするするなり。

「まあ、そんで俺はさっき説明したコーネリウスと言うとこからやって来てな、江戸に行くつもりやったんや。ある人物さがしてな。」

「・・・・・・」

僕はどう言えば良いのかわからなかった。

「じゃあ、なんで日本語、しかも関西弁しゃべれるんですか」

あんなの一発でうそと見破れるよ。

このとき僕はまだしらなかった。

その世界が実現すると言うことと、その世界に僕自身が行くということを・・・

２０：２３

驚き

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

僕がそう質問するとその人は言った

「力使えば１っぱつや。まあそれなりのテクニックはいるけどなあ」

「はあーそれだったら、あなたは白の者の正義の使者ですか？」

その人は一瞬僕を見つめた後、すぐに笑いながら言った。

「まあ、白の者やな」

僕はこのとき早くこの人をだまらせたい？

ためにある方法を使った。

これ以上こんな人といっしょにいたくないからだ。異世界とか言っちゃてる。それならまだ江戸のほうが良かった。

母さんたちは2人とも出張で弟は小学生の1年なのに野球の合宿がある。僕ってついてない。

そして僕は酒を持ってきた。そしてその人の前に置いた。
「あー酒か気が利くんやな、将来いい旦那になるでえ」

「・・・どうも」
その人はぐいと酒を飲んだ。
しばらくしてその人は、ほろ酔い気分になったようだ。

＜このまま寝てくれますように＞
ぼくは心の中で今までにないくらい願った。

「あーそういやチビーさっきの話しやけどな、あれ嘘やで」
「あ、やっぱり」
僕は、嘘だとこの人が自覚しているようでほっとした。

だけど、その後紡ぎだされた言葉はさっきよりもひどくなっていた。

「俺はな、白の者やのうて黒の者や、ヒックまあ、あっちにはスパイで白の者の行商人に成りすましてるけどなークククヒック
江戸に行こうとしたんはな、まだ内緒やけど伊納　真太郎に関係あるんや。絶対誰にも言ったらあかんでー。黒でもそのことしっとる奴すくないからなーヒック」

先の言葉は訂正する。この人かなりヤバイみたい。

だけど、その人はその後スヤスヤと床の上で寝てしまった。
僕はこのことを聞いたために

とんでもないことに巻き込まれてしまった。

宿命の選択

朝になった。気温はまだ低い。

「おいチビお前に聞きたいことあるんやけど」

僕は寝てるフトンを突然その人に引き剥がされた。

「わっっ！！」

僕はその人が起きてたことにビックリした。

ていうより泊まらしてもらっておいて普通そんなことしないよ！！

けどその人の表情をみて何

か恐いものを感じた。

野生の狼みたいな目だ。

昨日とは随分大違いな真剣な表情だ。

「あのどうしたんですか？」

その人は僕の腕を昨日のようにまた掴んでいった。でも昨日とは掴

む力が違う。

「俺が昨日酔ったときなんか、何か言ったんやないか？かすかやけどおぼえててな・・・」

あー黒の者がどうのこうのの、でもなんで？

「あの、何か自分は、白の者じゃなしに黒の者だって言ってました。ハイ・・・そんで江戸のなんちゃら真太郎という人物探してるって・・・」

僕がそういうとその人は心底おどろいた様な表情をした。そして苦い表情になってすぐに銀色の物を僕にむけた。

「悪いなチビ。泊まらしてもらって何やけど、消えてもらうは。それめっちゃ秘密のことやねん」

その人のその時の言動で僕は殺されることが直ぐわかった。

僕は湿った空気を肌に感じた。どこまで妄想してんだこの人は！！！！というより自分は本当に異世界から来たと本当に思ってて、もしかして何かの宗教を吹き込まれたとか？悪魔を信仰するのか・・・・だから生命を吸い取るって・・・

とにかく僕はこんな精神異常者に殺されたくない、僕はその人の腕に無我夢中で噛み付いた。

「つっ！！」

その人の腕がその瞬間ゆるくなった。噛み付かれるとは思ってなかったみたいだ。

「ちょっとタンマや。もう俺もつかれてきたわ」

さっきの異様な気配がだんだんなくなっていった。

「死にたくないやろ」

その人は俺のベッドの上にこしかけた。

「死にたくないに決まってるじゃないですか」

「お前殺されたくなかったら俺と一緒にコーレニウスにこい、まあ俺の不注意やしな。責任持つわ」

そういってその人は立ち上った。そんな世界があるはずがない青汰はそう思っていた。

だけどついてこなければ殺される。その人の妄想の世界はどこにあるのだろう。

「ついてきます。」

その人と見事に目があった。

「よっしゃ、じゃあ行くで。」

今、異世界へのベールがはがされる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4201c/

あなた悪魔？！

2010年10月28日04時23分発行